

<編集後記>

ここに記念すべき『初年次教育学会誌』第1巻 第1号を会員諸氏のお手元に届けることができた。編集委員一同、ほっと胸をなでおろしているところである。

初年次教育学会自体、ユニバーサル段階に突入した高等教育において、新入生の高校から大学への円滑な移行を支援する初年次教育の重要性を認識した研究者や実践者を中心として2008年3月に設立大会を開催したばかりの初々しい学会である。山田礼子学会長のもと、300名を超す学会員の協力を得ながら学会として最初の一步を踏み出したところである。

学会誌は大会での発表とならんで、学会員の学術的な交流の場であるとともに、学会の学術的な活動を社会に対して情報発信する重要な手段である。学会に対する評価は、学会誌に掲載された論文の質によって決まるといっても過言ではない。第1巻の評価は、社会と歴史の判断に委ねるしかないが、編集に当たった者の自己評価としては、カリフォルニア大学ロサンジェルス校名誉教授のアスティン先生の講演原稿をはじめとして、いずれの論考も力作ぞろいであり、初年次教育の現状と可能性を理解するには、極めて意義あるものばかりであると自負している。

しかし、発行にこぎつけるまでの道のりは決して平坦ではなかった。編集委員会の委員は、全て学会誌の編集に関しては初心者であり、いわば「フレッシュマン」であった。編集規定作りから、表紙の色の決定まで、全て手探り状態で作業せざるを得なかった。いかに「First Year」が困難な時期であるか、まさに身をもって体験したところである。しかし、山田会長をはじめとする理事の方々の助言と支援を得ながら、なんとか発行にこぎつけることができた。支援と助言を得ながら、一つひとつ課題を克服していくことによって、不安や心配が次第に達成感へと変わっていった。このような経験によって、円滑な移行を支援する初年次教育の重要さが、改めて編集委員一同の心に刻み込まれたところである。

第1巻は、学会創立後間もないということもあり、全て依頼原稿による編集となった。執筆依頼に快く応じて下さった執筆者の方々に、厚くお礼申し上げます。次号からは、会員諸氏の投稿原稿を中心に編集を進める予定である。初年次教育学会は、ようやく離陸したところである。より高い高度に達するにはより強力な推進力が必要である。そして、その推進力は会員諸氏の研究活動や実践力に他ならない。会員諸氏による、多数の優れた論考の投稿を期待したい。

最後に、編集委員の方々に心よりお礼の言葉を伝えたい。本誌は編集委員会がいわば「学習共同体」として、それぞれの体験と知恵を持ち寄って、文字通り手作業によって作り上げたものである。誰一人欠けても、発行にいたることは不可能であった。

編集委員会を代表して 川嶋太津夫